

# 「夢」に関連する語の推移について

野 原 康 弘

## 0. はじめに

Geoffrey Chaucer (c. 1340–1400) の作品には「夢」という名詞, あるいは「夢を見る」という動詞に当たるものが, それぞれいくつか使用されているが, 現代英語 (ModE) では名詞も動詞も両方とも ‘dream’ で代表される。Chaucer の作品に, それらを表わす語がいくつか存在するということは, 「同じ概念を表わすのに, あるいは同じものを名指すのに, しばしばいくつかの用語が存在していた (Baquet, p. 21)」という古期英語 (OE) の一つの特徴が中期英語 (ME) まで引き続いていたことを示している。もしスカンジナヴィア語からの意味の借用<sup>1)</sup> (古期英語にあった語が, スカンジナヴィア語のもっていた形なり意味なりを取り込んで存続したものもある (Mosse, p. 46)) がなければ, dream という語は, ModE においては「夢」ではなく本来の「喜び」(OE. *drēam*, ‘joy, juvilation, music, minstrelry’ (Onions, p. 289)) の意味になっていただろう。それでは dream 以外の他の語はどうなってしまったのだろうか。完全にすたれてしまったのであろうか。外来語に取って代わられたのであろうか。それとも, いくつかの語が淘汰され一つの語になったのであろうか。本稿では, Chaucer の作品を中心に, 「夢」に関連する語の推移ということについて考えてみようと思う。

## 1. Chaucer が使用した「夢」に関連する語

中世の作品 (medieval works) には, 夢を題材にしたものが多い。例えば, Dante の *Divina Commedia* や *Roman de la Rose*, 英国では, *Pearl* や *The Vision of Piers Plowman* などがあり, Chaucer の作品も例外では

なく, *Roman de la Rose* の翻訳を始め, *Dethe of Blaunche*, *Parlement of Fowles*, *The House of Fame* などがそうである (Sisam, pp. 44-45)。

「0. はじめに」で述べたように, ModE においては, dream という一語で十分表現しうる「夢」あるいは「夢を見る」が, OE においては名詞は swef(e)n と mæting, 動詞は swefnian と mætan が使用されており, drēam はまだ本来の意味でしか使用されていない<sup>2)</sup>。ME においてはどのようなのであろうか。Chaucer の詩の一部の, たった10行の中に「夢」を表わしていた語がほとんどが登場するところがある。

- (1) God turne us every drem to goode!  
 For hyt is wonder, be the roode,  
 To my wyt, what causeth swevenes  
 Eyther on morwes or on evenes;  
 And why th'effect folweth of somme,  
 And of somme hit shal never come;  
 Why that is an avisioun  
 And this a revelacioun,  
 Why this a drem, why that a sweven,  
 And noght to every man lyche even;

これは, *The House of Fame* の book I の冒頭の10行であるが, 下線が引かれた drem (1行目), swevenes (3行目), avisioun (7行目), drem (9行目), sweven (9行目), が夢に関連する語である。ここで Chaucer の作品に登場する「夢」に関連する語を整理してみると, 以下のようになる。

a) 名詞

ME avisioun < OF avision 'vision'

Cf. ModE vision < OF vision

「夢」に関連する語の推移について

ME dreem (dremes, dremyng(es))

< OE drēam 'joy, music'<sup>3)</sup>

ME sweven (swevenes, swevenys, swevening(s))

< OE swef(e)n 'sleep, dream, vision'

一方、「夢を見る」を表わす動詞は、上述のようにまとまって登場する箇所はないので、抜き出してみると以下ようになる。

b) 動詞

ME dreem (n) < OE drieman 'to make music or melody,  
to play on an instrument'<sup>4)</sup>

ME meten < OE mætan 'to dream'

ME sweven < OE swefnian 'to appear in a dream'

動詞の最後に挙げた語 sweven は Chaucer の作品には動詞としては登場しないが、当時、他の作品では動詞としても使用されているので、この動詞も含めて扱っていく。動詞 sweven と meten が ModE では使用されなくなったことが、言語上のなんらかの現象と係わりあっているかどうかを検討していくことにする。

2. 「夢」に関連する名詞

ここでは特に、Chaucer の *The Nun's Priest's Tale* (以下 NP と略) と *The House of Fame* (以下 HF と略) を中心に (適宜、他の作品からも例文は引用する場合もあるが) 「夢」に関連する語の意味と使用について具体的に見ていくことにする。

名詞に関しては、使用上の違いはほとんどないので、まず意味の違いに注目して述べてみる。Davis の *A Chaucer Glossary* によれば、ME における、それぞれの語の意味は以下のようになっている。

avision : 'vision, dream' (Davis, p. 10)

dre (e) m : 'dream, vision' (Davis, p. 42)

sweven : 'dream, vision' (Davis, p. 149)

以上で分かるように、三語ともまったく同じ意味 (dream という「夢」と vision という「幻」) を表現できたのである。問題になるとすれば、それが「夢」の意味で使用されているのか、あるいは「幻」の意味で使用されているのか判断し難い場合である。次の例を見て欲しい。

- (2) I am so ful of joye and of solas,  
That I diffye bothe sweven and dreem. (NP, 3170–3171)

下線部の解釈について、Hussey (p. 79) は Chaucer が sweven と dreem の間に一貫した違い (a consistent differentiation) を持っていたかどうかははっきりしないので、この行は解釈が出来ない (untranslatable) という立場を取っている。しかし、他のほとんどの学者は以下のような二つの解釈のどちらかの立場を取っている。

- (3) 'whatever sort of dream' :

Pollard (p. 37) Morrison (p. 198) Wyatt (p. 139)

- (4) 'all visions and all dreams' :

Cawley (p. 468) Coghill (p. 140) Wright (p. 147)

(3) と (4) は多少のニュアンスの違いはあっても、どちらも「夢や幻は信じない」という意味の強調、すなわち「夢であろうと幻であろうとそんなものは気にもかけない」という意味を示している。意味の上では、sweven でも dreem でもどちらか一つで十分であったかも知れないが、この場合次の行の beem<sup>5)</sup> と韻を踏む関係でどうしても dreem を使う必要があったと

考えられる。

この NP の話の中に「夢の重要性を説く人物」の一人として Chaucer が登場させている Macrobius<sup>6)</sup> (1. 4313) は、夢をその内容から次の五つのタイプ、すなわち *somnium* (the enigmatic dream), *visio* (the prophetic dream), *oraculum* (the oracular dream), *insomnium* (the nightmare), *phantasma* (the apparition) に分けている (Fisher, p. 584)。そしてさらに、Coghill and Tolkien (pp.58-59) は、これらを大きく二つの範疇（前から三つのタイプを Prophetic dreams という範疇に、そして残りの二つのタイプを Meaningless dream という範疇）に分けて分析しているが、ここでは夢そのものの内容というより、それぞれの語が実際どういう内容の夢でどのような意味に使用されているかが重要であり、それを調べてみる。

「一般的な夢」（「夢というもの」）を表わす文脈で使用されている場合：

- (5) Allas! and konne ye been agast of swevenys? (NP 3921)
- (6) Seyde he nat thus, 'Ne do no fors of dremes?' (NP 3941)
- (7) For now at erste shul ye here  
So sely an avision (HF 2. 4-5)

「限定された夢」を表わす文脈で使用されている場合：

- (8) Now God, 'quid he, ' my swevene recche aright,  
And kepe my body out of foul prison. (NP 2896-2897)
- (9) And trust wel, his dreem he foond ful trewe, (NP 4023)
- (10) Macrobeus, that writ the avision (NP 4123)

「予言的な夢」を表わす文脈で使用されている場合：

- (11) A lite er he was mordred, on a day,  
His mordre in his avysioun he say.<sup>7)</sup> (NP 3113-3114)
- (12) Reed eek of Joseph, and ther shul ye see  
Wher dremes bre somtyme - I sey nat alle -  
Warnynge of thynges that shul after falle. (NP 4130-4132)

Sweven に関しては、*OED* によると、1840年のものが記載されている最後の例であるが、Wyatt (p. 139) は Wyclif's Bible (*Gen*, xli. 22) の1382年版では sweven が使用されているが、1388年版では dreem に取って代わられていることに注目し、sweven が当時においてでもすでに時代遅れ (already passing out of vogue) であることを指摘している。Weekly (p. 475) も同じ箇所を示す例文を挙げている。

一方、avision は sweven よりも以前に使用されなくなり、*OED* には16世紀前半の例までしか掲載されていない。おそらく、vision との意味がほとんど変わらない (In early texts a vision cannot always be clearly separated from avision... *OED*) ため、avisioun が持っていた「夢」の意味は dream に、「幻」の意味は vision に譲り渡したのであろう。

このように、avisioun, dreem, sweven と見てくると、「夢」を表わすあらゆる文脈で使用が可能であり、Chaucer の作品での使用頻度を調べてみると、avisioun 13回, dreem 74回, sweven 27回と、圧倒的に使用頻度が高いのは dreem であることがわかる。

### 3. 「夢」に関連する動詞

次に動詞に関して述べることにする。動詞の場合、名詞の場合とは逆に、意味の違いはほとんどなく、語法上の違いが非常に重要になってくる。すなわち、人称動詞か非人称動詞か、自動詞か他動詞か、他動詞なら目的語に何を取ることが出来るのかが問題になる。

ここでまず meten, dreme と sweven の使用されている具体的な例を検討していくことにする。

**Meten :**

非人称構造 (自動詞) :

Chaucer の作品にはこの構造は見られない。

非人称構造（他動詞）：

- (13) By God, me mette I was in Swich meschief (*NP* 3894)
- (14) Me mette how that I romed up and doun (*NP* 3898)
- (15) Hym Mette a wonder dreem, agayn the day. (*NP* 4078)
- (16) Me mette so ynly swete a sweven

(*Book of the Duchess*, 276)

- (17) Me mette suche a swevenyng

(*Romaunt of the Rose* (*RR*), 26)

人称構造（自動詞）：

- (18) The man mette in his bad, ther as he lay, (*NP* 4002)

人称構造（他動詞）：

- (19) Remembrynge on his dremes, that he mette, (*NP* 4003)
- (20) 'He wook, and tolde his felawe what he mette, (*NP* 4083)
- (21) Of Mercenrike, how Kenelm mette a thyng. (*NP* 4112)
- (22) Mette he nat that he sat upon a tree, (*NP* 4139)
- (23) That he hadde mette that dreem that I yow tolde.

(*NP* 425)

**Dreme (n)**

非人称構造（自動詞）：

- (24) Me dremed al this nyght, pardee, (*Tale of Sir Thopas*, 1977)
- (25) It is five yer or more ago —

That it was May thus dremed me, (*RR* 50 - 51)

非人称構造（他動詞）：

Chaucer の作品にはこの構造は見られない。

人称構造（自動詞）：

- (26) Men dreme alday of owles and of apes, (*NP* 4092)
- (27) Men dreme of thyng that never was ne shal (*NP* 4094)
- (28) Which causeth folk to dremen in here dremes (*NP* 3929)

- (29) Thus twies in his slepyng dremed hee; (NP 4012)  
(30) And al was fals, I dremed of it right naught  
(*Wife of Bath's Tale*, 582)  
(31) 'Paraunter, ther thou dremest of this boor,  
(*Troilus and Criseyde* (TC), 5. 1282)

人称構造（他動詞）：

- (32) *She dremed on the same nyght biforn*  
*How that the lyf of Ector sholde be lorn*, (NP 4143-4144)  
(33) The juge dremeth how his plees ben sped;  
(*Parliament of Fowls*, 101)  
(34) The carter dremeth how his carte is goon; (*Ibid.* 102)  
(35) For to be war of goossish peoples speche,  
That dremen thynges whiche that nevere were.  
(TC 3. 584-585)

Sweven に関して Chaucer の作品には動詞として使用した例はないので、Chaucer と同時代の William Langland (c. 1332-1400) の例を見してみる。

- (36) I slombride on a slepynge and sweuenyd so myrie,  
Pan gan I metena merueylyouse sweuene.  
(*The Vision of Piers Plowman*, Prol. 10)

この2行では、動詞 *sweuenyd* は人称構造（自動詞）として、また名詞の *sweuen* は *meten* の同族目的語（Cognate Object）、として使われている。*sweven* の動詞として使用された最後の例は、1532年のもので（OED）、最近の辞書は掲載していないものがほとんどで（*The American Heritage Dictionary of the English Language* (1992), *Oxford Advanced Learner's Dictionary* (1989) など）、見出し語として *sweven* があっても名詞の意味だ



けで、しかも archaic の表示がされている (*The Random House Dictionary of the English Language* (1979), *Webster's Third New International Dictionary of the English Language* (1981))。

以上の例文を整理してみると、sweven は上述のように Chaucer では使用されていないし、16世紀後半以降は一般的にも使用されなくなっている。一方 meten は、人称、非人称構造（他動詞）を問わず、いろいろなタイプのものを目的語として取っている。例えば、(13) と (14) は名詞節、(15)、(16)、(17) は同族目的語、(20) は what、(21) は a thing というように。これに対して dreme は (35) のように名詞あるいは (32)、(33)、(34) のように名詞節を目的語に取ることが出来るくらいで、‘dreme a dreem’ や ‘dreme a sweven’ のように同族目的語を取った例はない。Dreme よりも動詞としての機能をはるかに備えている meten を Chaucer が好んで使用したことは、その使用頻度を比べてみてもすぐに分かる。Sweven 0回、dreme 12回に対して meten は44回も使用されている。その meten が、どうして機能的にも劣っていた dreme に取って代わられたのであろうか。まず一つは dreme に meten が持っていた機能が備わってきたことである。すなわち、動詞 dreme が同族目的語として名詞 dreem を取れるようになり、dreme a dreem<sup>8)</sup> という構造が生じたことである。17世紀初期の *Authorized Version* (AV) においては、Chaucer には見られなかった同族目的語を取る構造が登場し、統計的に言えば、dreme が13回登場するうち、10回がこの同族目的語を取る構造である (Grainger, p.10)。このことは、ME で meten が持っていた構造（例文 (15)）にも dreme が侵出し、meten と対等の機能を持つことで、「夢を見る」という動詞の地位を争える下地が出来つつあることを意味している。さらに、ここで、言語上の一つの現象が両語の「動詞地位争い」に大きく係ってくる。それは「非人称構造から人称構造への推移」<sup>9)</sup> という言語現象である。14世紀から16世紀までの間に、非人称構造を保持しつづけた少数の動詞 (think, like, seem, need など)を除いて、ほとんどの動詞が非人称構造から人称構造へと次第に推移していくわけであ

る。例文 (24) から (35) までよく見てみると、動詞 *dreme* は圧倒的に人称構造で使用されている。それに対して、*meten* の *OED* 最後の例は1643年のもので、しかも非人称構造のものである。すなわち、*meten* の場合、人称構造（最後の例は1570年 — *OED*）よりも非人称構造の方が好まれ、人称構造よりも少し長く使用されていたと考えることは無理なことではない。「非人称構造から人称構造への推移」という言語の現象が *meten* の使用を制限し、*dreme* の使用を促進する一要因として働いたことは確かなようである。

#### 4. もう一つの言語現象

ある語が長い間、使用されなくなった結果、まず古語になり、最終的には語の消失という形をとることになる。その原因はいろいろあると考えられるが、大きな原因としては、Baquet (pp. 21-22) が指摘しているように次の二つであろう。

一つは、ある物あるいは概念を表わしていた語に関してその物あるいはその概念そのものを消えてしまい、もう存在しない場合である<sup>10)</sup>。

二つ目は、同じ概念を表わしたり、同じ物を名指すのに、しばしばいくつかの語が存在していて、意味の面でも統語の面でも一語で十分事足りえた場合である。

「夢」に関する語の場合、二つ目の原因に当てはまる。「夢を見る」という動詞は、それがあらゆる統語的機能を満たしている場合、一語でも十分であり、まず *sweven* がすたれ、つぎに *meten* が使用されなくなり、17世紀後半以降に *dream* 一語に統一されていった。一方、「夢」という名詞は、*avision* が *vision* に吸収され、*sweven* は14世紀にすたれかけたとはいえ19世紀まで使用されて来たが、それまでもすでに動詞の地位をしっかりと確保した *dream* が、同じ形をした名詞 *dream* (*Early ModE* 以降、動詞も名詞も *dream* という全く同一のスペリングが一般的になっていく) への統一にもなんらかの影響を与えたり、さらに相互に影響しあって *dream* という語そ

のものが確立していったと考えられる。そしてここで見逃してはならない言語現象がある。それは、ME 初期から始まって ModE まで続いてきた Functional shift (別名 Conversion : 機能転換—Sweet, p. 38) である。屈折接尾辞の消失に伴い、形態上の変化を伴わず、語本来の語類が変わり、他の語類として働くことをいう。具体的にいえば、名詞が形容詞として、形容詞が名詞として、形容詞が副詞として、副詞が形容詞として、動詞が名詞として、名詞が動詞として、それぞれ使用されることで、例えば、round に至ってはそのままほとんどの品詞 (形容詞 : a round table, 名詞 : the round of seasons, 副詞 : all year round, 前置詞 : sit round the table, 動詞 : to round the corner of the board) に使用できる。このように、一つの語をどんな屈折接尾辞も付加することなくいろいろな品詞に自由に使える便利さは、他の言語に見られない英語の特徴の一つとなっている。一方で動詞 dream が sweven や meten を排斥し、「夢を見る」という動詞としての地位を確立していった。そして他方では、名詞 dream が avision や sweven を押し退け、「夢」という名詞の地位を確立しつつあったときに、動詞も名詞を全く同一の形をした語という Functional shift が dream の確立を決定づける要因として大きく働いたことは十分に考えられることである<sup>11)</sup>。その結果、名詞も動詞も「夢」に関連する語は dream 一語に統一されてしまうのである。

## 5. まとめ

最後に、これまで言及してきた「夢」に関連する語の変化をおおよその時代とともに表にしてみると以下ようになる (語の下の数字は OED に記載されている例の最初の年代である)。

	OE	ME	ModE
名詞			
	mæting (1000)	→	1430
	swef(e)n (897)	→ sweven	→ 1840
		swevening (1275)	→ 1423
		dreem (1250)	→ dream →
		avisoun (1297)	→ 1525 (vision)
動詞			
	mæten (1000)	→ meten	→ 1643
	swefnian (1000)	→ sweven	→ 1532
		dreme (1250)	→ dream →

こうして名詞と動詞を一覧表で見ると、やはり同一の形をした語の強さを改めて感じさせられる。Functional shift という英語史上の一つの言語現象が、dream に非常に有利に働いたことがよく分かるのである。OE では「夢」というものと何の関連もなかった語 dreem が、スカンディナヴィア語の意味の借用を受けて「夢」あるいは「夢を見る」という意味を持つようになり、前述の二つの言語現象（「非人称構造から人称構造への推移」と Functional shift）の影響を十分に活用し、20世紀に入ると、名詞においても動詞においてもその地位をしっかりと確立してしまうのである。語の推移（消失も含めて）とは本当に不思議なものである。

注

1) ここでの「意味の借用」の他に、「形の借用」もあり、スカンジナビア語が古期英語本来の形に取って代わらなかったら awe は ey, birth は bird, loose は lease, to get は to yet, to give は to yive および Thursday は Thundersday といった具合になっていたかもしれない (Mosse, p.46)。

2) OED によれば, dream が「夢」という名詞, 「夢を見る」という動詞で使われたのは, *The Story of Genesis and Exodus* (1250) においてが最初である:

On dreme him cam tiding (1179)

Good is ... to dremen of win. (2067)

3) 名詞 dream のこの意味での最後の例は1330年のもの (OED)。

4) 動詞 dream のこの意味での最後の例は1240年のもの (OED)。

5) この dreem と韻を踏んでいる行は:

and with word he fley doun fro the beem,

6) Ambrosius Theodosius Macrobius (fl. A. D. 395-423) : Macrobius wrote a Commentary on Cicero's *Somnium Scipionis* which distinguished between various types of dreams;... (Coghill & Tolkien, p. 58)

7) この 'say' は 'saw' のこと (Hussey, p. 77)

8) Jespersen (pp. 137-138) は, この 'dream a dream' という構造はまれで, 実際には以下の例のように同族目的語に修飾語を伴う構造が一般的であると主張している:

I would faine dye a dry death. (Shakespeare)

She smiled a little smile and bowed a little bow (Trollope)

Mowgli laughed a little short ugly laugh (Kipling)

9) ここでは, その推移の原因については触れない。Nakao (p. 299) を参照のこと。

10) 古期英語の実詞 *peod* 「国民, 種族」およびその複合語あるいは派生語は, 発生的に *peoden* 「首長, 王子, 王」および (*gepeod* 「(話し) ことば」) と結びついてしたが, それらの政治・文化上のすべての親族関係語とともに消えてしまった。

11) もちろん, この考え方は名詞と動詞が同一形である *sweven* にも当てはまるが,

16世紀後半には動詞の用法がすでに廃用になってしまっていたためにこの現象の影響を受けなかったと考えられる。

参考文献

- The American Heritage Dictionary of the English Language*, 1992.  
Houghton Mifflin Company, Boston.
- Bacquet, P. 1974. *Le vocabulaire anglais*, Presses Universitaires de France, Paris. 『英語の語彙』(森本英夫 大泉昭夫 共訳 白水社 東京 1976)
- Bethurum, D. 1965. *The Spuire's Tale*, The Clarendon Press, Oxford.
- Bowden, M. 1965. *A Reader's Guide to Geoffrey Chaucer*, Thames & Hudson, London.
- Bradley, H. 1974. *A Middle English Dictionary*, The Clarendon Press, Oxford.
- Burgess, A. 1988. *The Riverside Chaucer*, Oxford Uni. Press, Oxford.
- Burley, D. 1983. *A Guide to Chaucer's Language*, Macmillan, London.
- Cawley, A. C. 1970. *Canterbury Tales*, J. m. Dent & sons Ltd, London.
- Coghill, N. 1986. *Tras. The Canterbury Tales*, Century Hutchinson, London.
- Coghill, N. and C. Tolkien, 1986. *The Nun's Priest's Tale*, Thomas Nelson and Sons Ltd. Surrey.
- Collin's Cobuild English Language Dictionary*, 1987. Collin's Publishers, Birmingham.
- Davis, N. 1981. *A Chaucer Glossary*, The Clarendon Press, Oxford.
- Elliot, R. W. V. 1974. *Chaucer's English*, Andre Deutsch, London.
- Fisher, J. H. 1977. *The Complete Poetry and Prose of Geoffrey Chaucer*, Holt, Rinehart and Winston, New York.
- Grainger, J. M. 1907. *Studies in the Syntax of the King James Version*, The

- Philological Club of the University of North Carolina, (清水 護 訳『欽定英訳聖書の構文』英語学ライブラリー (48) 1977 研究社, 東京)
- Handley, G. 1986, *Brodie's Notes on Chaucer's The Nun's Priest's Tale*, Pan Books, London.
- Havely, N. R. 1975. *The Frail's, Summoner's and Pardoner's Tales from The Canterbury Tales*, University of London Press, London.
- Hirose, S. 1975. *The Nun's Priest's Tale*, Osaka Kyouiku Tosho, Osaka.
- Hussey, M. 1978. *The Nun's Priest's Tale*, Cambridge University Press Cambridge.
- Jespersen, O. 1965. *The Philosophy of Grammar*, W. W. Norton & Company
- Kerkhof, J. 1982. *Studies in the Language of Geoffrey Chaucer*, Leiden University Press, Leiden.
- Longman Dictionary of English Language*, 1985. Longman Group Ltd. Harlow.
- Morrison, T. 1975. *Chaucer*, The Viking Press, New York.
- Mosse, F. 1958. *Esquisse d'une Histoire de la langue Anglaise*, IAC, Paris & Lyon, Trs. by Gunji, T. and H. Okada, 1963. Kaibunsha Ltd, Tokyo.
- Murray, et al. 1970. *The Oxford English Dictionary*, The Clarendon Press, Oxford.
- Mustanoja, T. F. 1985. *A Middle English Syntax*, Meicho Fukyukai, Tokyo.
- Nakao, T. 1972. *History of English II*, Taishukan, Tokyo
- Onions, C. T. 1978. *The Oxford Dictionary of English Etymology*, Oxford University Press, Oxford.
- Oxford Advanced Learner's Dictionary*, 1989. Oxford University Press, Oxford.
- Pearsall, D. 1984. *The Nun's Priest's Tale* (A Variorum Edition of The Works of Geoffrey Chaucer, vol. II, Part 9.) University of Oklahoma Press, Norman.

- Pollard, A. W. 1930. *The Nun's Priest's Tale*, Macmillan, London.
- The Random House Dictionary of the English Language*, 1979. Random House, New York.
- Robinson, F. N. 1974. *The Works of Geoffrey Chaucer*, Oxford Uni. Press, Oxford.
- Sisam, K. 1981. *The Nun's Priest's Tale*, Oxford University Press, Oxford.
- Skeat, W. W. 1972. *The Complete Works of Geoffrey Chaucer, vol. 5. Notes*. The Clarendon Press, London.
- \_\_\_\_\_. 1974. *An Etymological Dictionary of the English Language*, Oxford University Press, Oxford.
- Sweet, H. 1968. *A New English Grammar*, The Clarendon press, Oxford.
- Webster Third New International Dictionary of the English Language*. 1981. G. & C. Merriam Company.
- Weekly, E. 1921. *An Etymological Dictionary of Modern English*, John Murry, London.
- Wright, D. 1985. *The Canterbury Tales*, Panther Books, London.
- Winstanley, L. 1913. *The Clerkes Tale and The Squieres Tale*, Cambridge University Press, London.
- Wyatt, A. J. *The Nun's Priest's Tale*, Uni of Tutorial Press, London.



Explaining the Disappearance of  
Extinct Words Associated with  
the Concept DREAM

Yasuhiro Nohara

There were many words which existed in Old English and Middle English that became archaic or have disappeared in Modern English. Words that have expressed the concept DREAM are not exceptional. Geoffrey Chaucer used three nouns : **avisioun**, **sweven**, and **dreem**, and two verbs : **dreme** and **meten**, to express DREAM. (And **sweven** was also used as a verb at the age of Chaucer.) **Avisioun** may have evolved into the word **vision**, and **sweven** has become archaic in Modern English. Both of these verbs, **sweven** and **meten**, were not entered in modern dictionaries. Finally, **dream**, which did not originally mean DREAM in old English, has come to be used as a noun as well as a verb in Modern English.

The aim of this article is to explain why this has occurred. I believe two linguistic phenomena, 'Transition from Impersonal Structure to Personal Structure' and 'Functional Shift' have influenced this change.